

研究資料現代日本文学

淺井 清 松井利彦
佐藤 勝 武川忠一
篠 弘 吉田熙生
鳥居邦朗 編集

小説戲曲工

第一卷

明治書院

研究資料現代日本文学

第一卷 小説・戯曲 I

定価 4,100

昭和55年3月5日 初版発行

編者

浅井 清・佐藤 勝・篠 弘
鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一
吉田潤生

発行者

東京都千代田区神田錦町1-16
株式会社 明治書院
代表者 三樹 彰

印刷者

長野県長野市中御所町2-30
大日本法令印刷株式会社
代表者 田中 忠

発行所

株式会社 明治書院
〒101 東京都千代田区神田錦町1-16
電話 東京 (292) 3 7 4 1 (代)
振替口座 東京 3—4 9 9 1

© K. ASAI 1980

3391-25501-8305

製本 誠光社

は し が き

ある時代の文章は、そこに生きる人間精神の記録である。それはまず何よりも作品として存在し、その歴史的総体が広い意味での「文学」の実質を形成している。これが本シリーズを編纂した我々の基本的観点である。

従来、文学の名の下に扱われてきたのは、主として詩歌・小説の類であった。その多くは青春の歓喜や悲哀をうたい、象徴の森をさまよい、あるいはおぞき苦悶の告白を真摯に記したものであった。それらの作家と作品の研究が、今日めざましい充実と整備をみていることは周知の通りである。

しかし、文学が文章による当代の思想と感情の表現であるとするならば、それは単に詩歌・小説の類にとどまらず、その領域は広大なものと考えることができる。我々はたとえば画家の眩きに芸術創造の秘密を聞き、科学者のエッセイに現代社会への告発を読み、歴史家の文章に民族の運命を予感することができる。我々はこのような広義の「文学」によって自己の精神を形成し、我々自身の生きる時代の意味を明らかにしてきたし、またしつつある。それはまた国語教育が積極的に取り組んできた課題の一つでもあった。

『研究資料現代日本文学』全七巻は、近代・現代の「文学」というものを、言葉で表現された、そして同時代の思想状況を最も明晰かつ直截に伝えているものという観点から見直し、その著者と作品についてのこれまでの資料を集成整理し、現時点での意義を明らかにしつつ、今後の研究課題をも示唆しようとするシリーズである。編纂に当たっては、まず収録対象の拡大を試みた。すなわち、詩歌・小説はもとより、現代の知的散文、すなわち評論家、思想家、自然科学者、ジャーナリスト、芸術家、文学・言語学・歴史学・法学・経済学専攻の学者といった、さまざまな分野で活躍している人たちのエッセイや評論をも最大限に取り上げたことである。次にこれら

の対象を扱うに際しては、次のように配慮した。これまで研究成果のあがっている詩歌・小説については、現在の研究の最先端の問題を視野に収めながら、作家論・作品論への展開に直接役立つ資料やその紹介を整え、現代の文章については基礎的資料の整備と読解・評価の手がかりを提示した。いずれの場合も、作者・筆者の人間形成、文学的展開については、その叙述が平板な羅列に陥らぬよう、それぞれの問題への視角を明示しつつ利用の便をはかったつもりである。

ここで取り上げた人名や作品の項目の選定に当たっては、近代日本文学史上重要な作家・作品はもとより、高等学校の教材あるいは大学入試の出典としてしばしば採用されるものを網羅すべくつとめている。本シリーズの性質上、時には文学史的価値よりは教材としての価値に重点が置かれていることもある。従って本シリーズは、教材研究、大学入試問題研究、さらには読書指導の資料としても活用することができるとは思ふ。

各項目の解説には、研究・教育に携わる多くの方々の手を煩した。編者の意を諒とされ、快く執筆して下さい。各位に厚く御礼申し上げる。終始助力と鞭撻を惜しまなかった明治書院の小林美枝子・藪上信吾両氏にも謝意を表さなければならぬ。本シリーズが従来の評価・研究の動向をふまえた上で多岐にわたる現代の文章を新しい総合的視点から読み解き、指導するための指針として役立つならば、編者の喜びこれに過ぐるものはない。

昭和五十五年二月

編 者

凡 例

- 一、本巻は、『研究資料現代日本文学』の第一巻、小説・戯曲Ⅰである。本巻及び第二巻で小説・戯曲のジャンルを取り上げる。
- 一、作家の配列は、活躍した年代順を原則とした。本巻では、明治以降、昭和十年代までの作家を取り上げた。
- 一、各作家についての解説は、【人と文学】【代表作解説】【研究の動向】の三つを柱とし、資料としての活用能耐えうるように配慮した。
- 一、引用・出典の明示や、発行所・発行年月の厳密を期した。又、原典よりの引用は、へゝを付し、原典その他の仮名遣いを原則とした。
- 一、新聞・雑誌・単行本名は『』で示し、その他は「」とした。
- 一、年号の記述は簡潔を旨とした。（昭一五・六・二八）は昭和十五年六月二十八日を示し、（昭一五・六〇八）は昭和十五年六月から八月を示す。
- 一、小説・戯曲ⅠⅡでは、文学史の理解を考慮し、明治・大正・昭和の文学史概観と、文学史の事項の解説を適宜挿入した。

目次

はしがき	1
凡例	III
坪内逍遙	40
二葉亭四迷	44
山田美妙	49
尾崎紅葉	51
幸田露伴	55
樋口一葉	58
泉鏡花	69
徳富蘆花	76
木下尚江	86
国木田独步	88
島崎藤村	97
田山花袋	107
徳田秋声	112
岩野泡鳴	114
正宗白鳥	116
森鷗外	120
夏目漱石	141
鈴木三重吉	157
永井荷風	161
文学史事項	
近世から近代へ	1
啓蒙思想	4
文明開化	6
明六社・明六雑誌	7
戯作	8
翻訳文学	10
政治小説	12
近代ジャーナリズムの成立	13
明治の文学	16
写真主義	20
浪漫主義	22
自然主義	24
言文一致	48
硯友社	54
『文学界』	68

谷崎潤一郎	168
志賀 直哉	179
武者小路実篤	191
有島 武郎	197
長与 善郎	206
芥川龍之介	208
菊池 寛	225
倉田 百三	230
山本 有三	235
佐藤 春夫	239
葛西 善蔵	249
滝井 孝作	253
横光 利一	255
川端 康成	264
井伏 鱒二	279
梶井基次郎	293
嘉村 礒多	303
堀 辰雄	305
伊藤 整	316
阿部 知二	330
芹沢光治良	333
大仏 次郎	337
葉山 嘉樹	340

深刻小説	74
観念小説	75
社会小説	85
ゾライズム	111
家庭小説	84
反自然主義	140
耽美派	178
活歴物	159
新派	167
文芸協会	195
自由劇場	223
『我楽多文庫』	53
『しがらみ草紙』	57
『国民之友』	73
『早稲田文学』	96
『スバル』	228
『三田文学』	234
大正の文学	26
白樺派	196
新思潮派	224
奇蹟派	252
私小説	30
通俗小説	229
児童文学	160

黒島 伝治	344
中野 重治	347
小林多喜二	356
徳永 直	358
島木 健作	362
尾崎 一雄	367
高見 順	369
太宰 治	373
野上弥生子	389
宮本百合子	394
平林たい子	398
林 芙美子	400
佐多 稲子	405
円地 文子	409
岡本かの子	413
小山内 薫	419
真山 青果	422
久保田万太郎	424
三好 十郎	426
岸田 国士	430
久保 栄	434
田中千禾夫	436
秋元 松代	448

築地小劇場	292
『赤い鳥』	251
昭和の文学	32
プロレタリア文学	36
『種蒔く人』	315
『文芸戦線』	393
『戦旗』	404
新感覚派	263
モダニズム文学	38
『文芸時代』	418
『文学界』	421
『人民文庫』	450
『小説・戯曲』作家索引	451
代表作索引	453

近世から近代へ

近世文学

近世を慶長八年（一六〇三）の江戸幕府の開府から慶応四年（一八六八）の幕府崩壊までと限定してみると、幾つかの特長的な事実が目立つ。まず文化の中心が上方から江戸へと移っていくといういわゆる文運東漸を背景に、文学もまた上方文学から江戸文学へとなってくる。その過程で元禄・安永・天明・文化・文政と三つの文化のピークを持つ。その最初の元禄文学は、人間性を肯定し現世の享楽を描いた井原西鶴、俳諧をわびやさびの境地でとらえ文学性を高めた松尾芭蕉、義理と人情のはざまに生きる男女の愛と死を浄瑠璃の世界に描いた近松門左衛門という類稀な個性の持ち主が異なるジャンルに出現して、豊饒な町人文化の開花をみせる。安永・天明期の文学は与謝蕪村・上田秋成・本居宣長・平賀源内・山東京伝・大田蜀山人らが現れ、洗練された知的唯美的世界に、軽妙と優雅の文学を完成させた。今日でいう粋な、渋い、あかぬけしたと形容される日本人好みの美意識の源流は、ここに遡って求めることができるのである。この美意識の表現様式や芸術至上の態度の中に徳川期の文化の頂点を見出し、近代への出発点とみなす考え方もある。次の文化文政期の文学は、頼山陽・滝沢馬琴・鶴屋南北・十返舎一九・式亭三馬・柳亭種彦・為永春水・良寛・小林一茶らによって代表される。ここでは前代の都会的洗練さは失われ、代わってその泥くささの中に野性味溢れる力強さが甦り、その文学には現実的写実的土着的傾向が高まり、時には残酷・神秘・怪奇・淫蕩が強調

される場合があった。その頹廃と享楽の美に衰弱を見ることも可能であるが、またそこに次代を生み出すエネルギーが沸騰していたと考えられないこともないのである。既に徐々にではあるが出版機構や流通機構の大規模化が始まっており、文学の大衆化、通俗化もまたその兆しが見え始めていた。

近世の文芸観

近世の文学は近世封建社会の所産である。近世における政治の中心は徳川幕府であり、近世社会の指導的支配的地位にいたのが武士階級であった。彼らは儒学、中国古典、伝統的な漢詩文、和歌を教養とし、人間形成の資としての文学を重視した。従って彼らはその芸術性を尊重するよりも、たとえば詩は志であって、儒教的な経世済民、治国平天下の志を託す手段であることをたてまえた。

一方、近世初頭より次第に経済的実力を蓄えてきた町人階級は、元禄期に浮世草子・俳諧・浄瑠璃といった新しいジャンルを完成し、以来安永・天明・文化・文政と通して、読本・滑稽本・黄表紙・洒落本・人情本・合巻・歌舞伎・狂歌・川柳と、次々に自分たちの文学や劇を開花させていった。もちろんその作者や享受層に武家出身者がいなかったわけではない。ここで明らかにしておきたいのは、これらの文学を主として支持し推進してきた中心が町人階級であったこと、そして出身階層にこだわらぬ自由なサークルが文学創造の場として形成されてきたという事実である。もちろんこれらの人々に対する幕府の統制はきびしく、その自由も強い制限の中におかれていた。それらの枠の中で春水や馬琴らの文学が生まれ、枠を超える人間の情念をとらえてみせたのである。武士と町人、いわばこの二つの文学形成層の対立と相剋とひそやかな交流を通して、近世文学

の総体は創出され、豊かな実りをもたらしたのである。

転換期の文学

この二つの文学観の流れは、維新後、接近し交錯しやがて変貌をとげていく。明六社を中心とする啓蒙思想家たちの文学観は、西周らを例外として、基本的には経世済民の文学につながるものであった。彼らは封建体制・身分制度の打破を叫び、自主独立を主張し、近代ヨーロッパの政治・社会・文化に範をとるべく説いた。しかしその啓蒙的著作が戯作の方法を援用する場合があった。たとえば福沢諭吉の『かたわ娘』（明五・九）がそれで、その趣向と文体を戯作に近づけることによって、その啓蒙的意図がいっそう生かされている。諭吉の意識の中には小説の蔑視があっても、戯作のもつ庶民性や平易性は無視できなかったことになる。一方、戯作にとっても啓蒙的著作は格好の題材であった。幕末から明治初期にかけて活躍した仮名垣魯文は、福沢諭吉の『西洋旅案内』（慶応三）を種本に『万国西洋道中膝栗毛』（明三・九）を、『訓蒙窮理図解』（明元）のパロディ『和伝胡瓜遣』（明五・一）を発表した。ここでは戯作が啓蒙書を下敷に文明開化の世相を滑稽と洒落の世界でとらえ、また啓蒙書それ自体すらパロディ化することがあったのである。このような両者の接近と交錯は相互の活力を増すことはあったが、文学性は両者とも必ずしも高いとは言えないが、ただ戯作が地口や洒落などで言葉の活力を甦らせ、さらに風刺精神へと結びついていった時、その可能性は残されていたのである。しかし明治五年四月、この年設立された教部省のいわゆる敬神愛国、天理人道、皇上奉戴の「三条の教憲」の公布によってしばらくその活動を中断することになる。やがて小新聞という新しいメディアと結びついて、その雑報、雑報続き物、評判記などで復活し、新聞統

き物や明治合巻の世界に明治戯作は変貌していくのである。

他方、成島柳北に代表される幕末知識人たちの漢文戯作がある。彼らのほとんどは明治新政府には入らず野にあって活躍した。柳北でいえば『柳橋新誌』（明七）、また『朝野新聞』の雑録、『花月新誌』の狂詩狂文などにみられる風刺とその根底にある現実認識と離世意識は反近代の新しい視点をひらいていくことになる。

新文学の登場

戯作が新旧両時代をつなぐ文学であるとすれば、新時代を告げる文学は翻訳文学と政治小説で、ともに明治十年代が最も盛んであった。翻訳小説は文明開化という新しい時代の要求にふさわしい読物で、翻訳小説を通してはじめて西欧の社会・人物・生活・風俗を如実に知ることができたし、その背後の制度や思想をも知ることができた。その意味では啓蒙の一翼をになつていたし、また漢文読み下し体（当時は新家文と呼ばれた）のリズミカルな調子もまたその清新さの一つで、大きな影響を残した分野の小説である。また外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎共著の『新体詩抄』（明一五・八）に収められた訳詩十四編は文学的には未熟な部分も少なくなかったが、近代詩の出発点となるのであった。政治小説は自由民権運動の昂揚を背景に登場してくる。政治小説にはデュマ作桜田百華國訳『命起源 西洋血潮小暴風』（明一五・六）○（三〇・一〇）などのような創作政治小説とある。ともに政治的寓意と啓蒙を狙ったもので民権運動を内から支える力を持っていた。小説の形式は明末から清初にかけて流行した才子佳人小説の形式をかり、自由民権運動に挺身する政治青年と彼への理解と愛情に生きる佳人を配し、苦難の末に結ばれるという物語のものが多く、

しかし小説の中にこめられた作者たちの政治的情熱や体制批判は読者を鼓舞、拡大し、小説観を改めさせる力を持っていた。人物描写の類型性や寓意の底の浅さを指摘する向きもあるが、これらの欠点をのりこえて現実と切り結ぶ地点に小説を成立させ、読者に訴え、その眼をひらかせる力を持つ小説は政治小説の出現によってはじめ可能となったのである。その意味で政治小説は戯作の遊戯性を克服し、小説観を改めさせたとと言えるが、その政治小説に必然する功利性を根本から改めて問い直し、前代の文学観を批判し、新時代の文学理念と方法を確立するためには、坪内逍遙『小説神髓』（明一八・九―一九・四）の登場までまたねばならなかった。

研究の動向

三好行雄は「西洋を基準とする『近代』と、そのあまたしい受容が逆照射した『反近代』」とを同時に「見とおす複眼を手に入れることなしに——言葉をかえていえば、文学史の評価基準を文学史の外にはなく内から発見しなければ、日本の近代文学史は正當に評価できないだろう」（『日本文学の近代と反近代』東大出版、昭四七・九）と、「近代から近代へ」の過程の内実の検証を提唱する。この立場から最近の研究動向を概観する。

近世文学史の最新の成果は、市古貞次・堤精二編『日本文学全史4 近世』（学燈社、昭五三・九）であり、近世から近代にかけては野口武彦・小池正胤・前田愛・延広真治の担当執筆の章は有益で示唆に富む。個人の著作では板坂元『町人文化の開花』（講談社新書、昭五〇・八）が隣接科学の成果を組みこみすぐれた史的眺望と独創的な見解を織り込んでいる。比較文化の視野に立つ研究では、芳賀徹『与謝蕪村の小さな世界』（講座比較文学3 東大出版、昭四八・八）、「徳川時代の文化史的情景」（講座比較文化）研究社、

昭五一・三）がある。芳賀は永い「徳川の平和」から醸成された日本人の生活感覚と心理や博物趣味に潜む実証精神の成立を背景に、新しい鋭い美的感覚の表現様式を探り、洗練された瀟洒な趣味の底に不安とアンニュイを指摘、近代人の原像を見出す。

次に近代から近世をとらえ、伝統と西欧文化の受容を通して近代文学の基盤を探ったものに越智治雄『近代文学の誕生』（講談社新書、昭五〇・九）がある。この時期をもっとも精力的に調査し、独創的な視点に立って次々にすぐれた成果を発表しているのが前田愛である。前田の成果は『幕末・維新期の文学』（法大出版局、昭四七・一〇）『近代読者の成立』（有精堂、昭四八・一一）『成島柳北』（朝日新聞社、昭五一・六）『鎖国世界の映像』（毎日新聞社、昭五一・一一）『幻景の明治』（朝日新聞社、昭五三・一一）がある。興津要『転換期の文学——江戸から明治へ』（早大出版部、昭三五・一一）同『明治開化期文学の研究』（桜楓社、昭四三・一一）同『最後の江戸戯作者』（実業之日本社、昭五一・七）の一連の研究、また中村幸彦『戯作論』（角川書店、昭四一・九）などは必須の文献である。

共同研究では前田愛司会『幕末の文学』（シンポジウム日本文学11 学生社、昭五二・三）越智治雄司会『近代文学の成立期』（シンポジウム日本文学12 学生社、昭五二・九）、また林屋辰三郎編『文明開化期の研究』（岩波書店、昭五四・一一）などに注目すべき成果が収められている。

この時代の研究動向の展望と評価については、三好行雄・竹盛天雄編『近代文学1 黎明期の近代文学』（有斐閣、昭五三・三）がきわめて便である。

啓蒙思想

〈概括〉

日本の文明開化期における代表的イデオロ

ギーが啓蒙思想で、その最盛期は明治四年の廃藩置県よりほぼ明治十年に至る時期にあたる。元来「啓蒙」とは無知蒙昧を啓発する——すなわち、個人の自覚と自発的能動性を高めつつ民衆一般の知識を啓発し、近代的市民としての思考認識を新たにしていることを意味し、カントの言葉を借りれば、人間が自主的に自己の理性の働きをもって、みずからに責任のある「未成年状態」から脱却することに他ならない。これが、歴史的な概念として用いられる場合には、十七世紀末から十八世紀末にかけてのヨーロッパ近代社会形成期に、理性をかがけて既存の宗教的、世俗的権威を打破し、個人の尊厳と自立的市民を育成する目的をもって登場した思想運動乃至思想形態を指すのが普通である。こうした一般的乃至歴史的な啓蒙の概念をもって明治啓蒙思想を一概に規定することはなお困難を要するが、ほぼかかる思想傾向を帯びて明治初期に日本の近代国家建設の一翼を担って登場したのが「明六社」を中心とする一群の思想家集団であった。明六社に結集した人々が新政府の開明政策の路線にそって、民衆の蒙昧を啓き、自立的近代的国民を形づくることに鋭意努力した事実を考えると、彼らがもたらした新思潮を啓蒙思想と称することはあながち不当ではあるまい。

〈成立と展開〉

明六社は、明治六年森有礼の呼びかけに応じて結成された日本最初の学術結社であり、西周・津田真道・加藤弘之・福沢諭吉・中村正直・西村茂樹等当代一流の洋学者、知識人による自主的な啓蒙文化団体であった。彼らは機関誌『明六雑誌』（明治七・三・八・一一）を通じて大胆かつ斬新な論説を世に問いつつ、独自の啓蒙活動を展開して行くことになる。明六社の人々を中心とす

る当時の啓蒙活動はまた一方で、幕末以来の日本の近代化路線と深いかわり合いをもって推し進められたのであるが、そうした近代化路線と相關関係にあったこと自体が、日本の啓蒙思想に大きな歪みと特殊性をもたらす結果となった事実は否めない。

日本の「開国」は、欧米列強による「外圧」という国際的契機によって強制的に行われたものであり、明治維新はそうした「外圧」の下で、幕藩体制の内部矛盾の顕在化による国内的契機が国際的契機と複雑に絡み合いつつ現出された「民族革命」であった。近代的統一国家建設に急ぐ新政府にとって、「万国対峙」「世界併立」をめざす富国強兵政策は、対外的危機克服と民族独立の保持のための重大かつ至上の課題であり、近代化への最短距離でもあったのである。かかる民族的危機意識の中で、「一身独立して一国独立する」〔学問のすゝめ〕三編明六・一二〕という福沢諭吉の言葉に端的に示されるような自覚的個人と自立的国家とが内面的連関性をもって並列的に捉えられるという思考様式が、必然的に啓蒙思想家の内に生まれてくることになる。すなわち、彼らにとって個人の自由・独立はあくまで天皇制国家機構の枠内で達成されるべきものと理解されていたといえよう。こうした基本的認識に立つて、彼らは西洋近代思想や制度・文物を積極的に摂取導入しつつ、新政府の近代的開明政策に自発的かつ能動的に協力する国民の創出を期待することになる。そのため、彼らは儒教主義的な「虚学」を批判し、実用主義的合理主義的な「実学」を勧めて、人民の封建卑屈の精神からの脱却と独立不羈の精神の涵養を図ると共に、自然法的な天赋人權論に依拠して自由・独立の普遍的観念や人間の欲望充足、幸福追求の権利を説き、現実的・功利的な人間観を民衆に提示普及させることに最大の

関心を払ったのである。福沢の『学問のすゝめ』、加藤弘之の『国体新論』（明七）や津田真道の『情欲論』（『明六雑誌』明八・四）、西周の『人世三宝説』（『明六雑誌』明八・六・一）はいずれもこうした観点から書かれたティビカルな啓蒙論であり、近代的国民精神を涵養する上でまさに新しい思考原点をなすものであったといえよう。彼らのこうした主張は、民衆を封建的束縛的な「因襲」の世界から解放すると同時に、自由で合理的な「現実」の世界へ導き入れる役割を果たし、彼らの当初の意図をのり越えて国民に真の近代市民としての自覚を促す結果となった。かかる点にこそ彼らの啓蒙思想家たる所以があったことを忘れてはなるまい。しかし、明治七年一月に民権議院設立建白書が左院に提出されるや、彼ら啓蒙思想家のほとんどの者が民衆の知的未開の現状認識にもとづいて「時期尚早論」もしくは「漸進論」の立場を堅持して国民の政治参加に消極的態度を示し、さらにまた翌明治八年六月反政府運動取締の名目で議院、新聞紙条例が制定されると、彼らはいよいよ機関誌『明六雑誌』を廃刊して状況を静観する態度に出たのである。こうした政治権力に対する消極的態度は、彼らの社員十二八九人官吏という社会的立場も然る事ながら、対外的独立への強い要望と彼らの意識の根底に存在する愚民観をはしなくも露呈したものであった。だがあくまで民衆の「愚昧」を前提としての「啓蒙」である以上、そうした愚民観をもつこと自体がむしろ啓蒙思想家たる彼らの本懐であったのではなからうか。

〈意義〉 啓蒙思想内部に存在する進歩的側面と反人民的側面という二重構造的性質を考えた場合、明治啓蒙思想の評価をかかる反人民的性格という社会的脆弱性の側面からのみ行うことは、あまりに

一面的にすぎるのではないだろうか。むしろその評価すべき点は、既成の価値観や思考方法を転換させて自由で合理的な思考認識を新たに民衆に喚起させ対外的危機に対処しうる国民意識を養成させ得たことと、後に続く民権思想や民衆思想の源泉的役割を果たしたことに求められるべきではないかと考えられるのである。

〈研究の動向〉 次に啓蒙思想研究の業績と最近の動向を簡単に述べておきたい。明治初期の思想を啓蒙思想として対象化し、その歴史的役割を本格的に評価したのは、戦前では鳥井博郎『明治思想史』（三笠書房、昭一〇・九）と永田広志『日本唯物論史』（白揚社、昭一一・九）の両著であり、昭和初期の唯物史観により明六社思想家の啓蒙活動におけるイデオロギー的機能が高く評価したものであった。かかる思想史的研究の前提となる実証研究の先駆的業績としては、麻生義輝『近世日本哲学史』（近藤書店、昭一七・七）、大久保利謙『日本の大学』（創元社、昭一八）があげられる。麻生は幕末洋学の展開過程に注目しつつ、啓蒙思想の内部にみられる近代的性格と封建武士的性格の矛盾を同書で鋭く指摘した。戦後の研究は、戦前の唯物史観を継承発展させた形で始まり、遠山茂樹『明治維新』（岩波書店、昭二六・二）、服部之総『明治の思想』（理論社、昭三〇・八）があいっいで発表された。啓蒙思想家の啓蒙の性格について、遠山は「啓蒙専制主義」、服部は「絶体主義的啓蒙思潮」の評価をあたえているが、これらはいずれも著者たちが明治維新そのものを絶対主義政権として規定把握した結果に他ならない。その他服部・遠山説を理論的に継承しつつ、「西欧十八世紀啓蒙」の概念を比較援用して日本啓蒙思想の構造的特質を究明したものに宮川透『近代日本思想の構造』（東大出版、昭三一・五）、同『現代日

本思想史』(青木書店、昭四六・一)がある。一方、従来のイデオロギー的機能の分析に対して、啓蒙思想家たちの思惟構造の内在的分析を通じて評価する方法的立場が丸山真男を中心とする一派によって確立され、松本三之介『近代日本の政治と人間』(創文社、昭四一・一)、同『啓蒙思想の展開』(『近代日本政治思想史』)有斐閣、昭四六・二)、植手通有『日本近代思想の形成』(岩波書店、昭四九・三)の諸著作では啓蒙の思想的契機を幕末儒教に求めることで啓蒙思想の発展段階論的立場を徹底究明することに一応成果をおさめている。こうした啓蒙思想家の思想そのものだけ対象とするのではなく、啓蒙の対象となった民衆側の意識を明らかにして、そこから啓蒙思想の歴史的役割を照射させる研究方法も最近では進み、色川大吉『明治の文化』(岩波書店、昭四五・四)、安丸良夫『日本近代化と民衆思想』(青木書店、昭四九・九)、ひろたまさき『啓蒙思想と文明開化』(『日本歴史・近代』)岩波書店、昭五〇・八)はこうした視角から啓蒙思想を分析したみごとな成果である。啓蒙思想の今後の研究課題としては、従来の諸業績の成果をふまえた上で、さらに深い実証的研究を積み重ねるとともに、明六社人の思想分析のみにとどまらず同時期に啓蒙活動を行った他の知識人たちも含めた思想構造の分析検討と、当時の西欧文化との「文化接触」「文化摩擦」といった比較文化史的な広角な視点からの把握研究が必要である。

(犬塚孝明)

文明開化

『文明開化』は明治初期の時代的風潮を的確に表現した言葉ではあるが、そこには前時代の古さと新時代の新奇さとが奇妙な調和を保ちつつ、ある種のロマンティックな幻影とオブティミスティックな陽気さを感じさせるものがある。

がある。

〈成立と展開〉

それは喻えてみれば牛鍋のあの牛肉と在来の醬油の混合した庶民的な「味」であらうか。仮名垣魯文が「土農工商老若男女、賢愚貧富おしなべて牛鍋くはねば開化不進奴」(『牛店安愚楽鍋』明四・四)と記して「開化」の情景を戯画化したとき、東京横浜を中心に欧化の波は怒濤のように日本に押し寄せて来ていた。だがそうした欧化の波を最初に受けとめ伝播させる役割を果たしたのは、無論あぐらをかきながら牛鍋の味を楽しむような庶民ではなく、〈自覚を以て新日本を建設した一部の有力な政治家〉(『ベルツの日記』)であり留学洋行帰りの知識人たちであった。彼らによる欧化の波の伝播——すなわち上からの近代化——欧化政策は、「文明開化」の名のもとに、明治四年七月の廃藩置県を皮切りに、散髪廃刀の許可、四民平等宣言、翌年の土地永代売買解禁、学制頒布、太陽暦の採用と続き、明治六年には徴兵令、地租改正条例等の新制度として結実施行されて行ったのである。彼らは西欧列強に「対峙」しうる強力な近代統一国家を建設するためにも西洋文化を積極的に移植しつつ新制度を創設し、富国強兵をはかり、さらには民衆を前近代的な封建的束縛から解放して国家に自発的に協力する近代的国民を創出する必要があった。こうした「欧化の波」の下への伝播の媒体役を果たしたのが、啓蒙思想家であり、開化物を著した通俗的啓蒙家や戯作者たちであったといえよう。福沢諭吉の『西洋事情』(慶応二・七)・明三・一〇)や『学問のすゝめ』(明五・二・九・一二)、中村正直の『西国立志編』(明三・一・一四・七)等の啓蒙書や翻訳書が飛ぶように売れ、仮名垣魯文の『万国西洋道中膝栗毛』(明三・九、加藤祐一『文明開化』(明六・九)、小川為治『開化問答』(明七・三)

等の戯作や通俗開化物が庶民にもてはやされたのも、こうした事情が大きく作用していたのである。彼らの説く合理性・実用性が一種の下町の庶民性や風俗世相の新奇さと結びついて、ここに明治新文化の先驅的現象としての文明開化がもたらされることになった。

《意義》 文明開化は確かに日本が国際社会に仲間入りするため天皇の權威と先進文明の優越性にと依拠しつつ上から強制された西歐化・近代化に違ひなかったが、これを受けとめる客体としての民衆の側にもその根底に積極的かつ前進的な受容の要素をもっていた事實は否定出来ない。かかる素因があったからこそ民衆は欧化に抵抗する一方で、欧化そのものを自己の成長の契機ともなしたし、上からのものを下からの欧化に転化させることもできたのである。そして、上からの文明開化が、その当初の意図をこえて、下からの文明開化へと転化したとき、本来的な文明開化、オブテイミステックな文明開化は終焉を告げることになる。だが、対外的独立と「万国対峙」のための文明開化が必然的に内包していた二重性格的要素―進歩と伝統、自主と統制―は、下からの文明開化としてのその後の民権運動にも依然として引き継がれて行くことになるのである。

《研究の動向》 文明開化の文化現象は、前述したように思想、政策、風俗世相等の諸視角から総合的に把握し検討する必要があるが、従来の業績では個別史的研究に重点がおかれていた恨みがある。戦前の尾佐竹猛・吉野作造・石井研堂等の実証的な明治文化研究の成果をふまえて、戦後木村毅『文明開化』（至文堂、昭二九・一一）や大久保利謙『文明開化』（『日本歴史 近代2』岩波書店、昭三七・七）が発表されて、総合的研究の端緒が開かれた。最近の業績としては

民衆思想史の面から文明開化研究に新境地を開いたひろたまさき「啓蒙思想と文明開化」（『日本歴史 近代1』岩波書店、昭五〇・八）や、比較文化史的観点から文明開化期における政府の欧化政策の基本的意図を多角的に捉えたものとして田中彰『岩倉使節団』（講談社、昭五二・一〇）をあげておくことにする。（大塚孝明）

明六社・明六雜誌

《成立》 明治初期における啓蒙思想家の代表的學術結社である「明六社」は、新帰朝

の駐米弁理公使森有札の提案により結成されたものである。明治六年七月、教育的関心から欧米流の學術文化団体を日本にも移植する必要性を痛感していた森は、帰朝早々に知人の横山孫一郎を介して西村茂樹に「学社」設立の意図を語り、西村の賛同を得ると早速創立準備にとりかかった。明六社創立事情に関しては西村の自伝「往事録」（弘道会、明三八・七）と森の「明六社第一年会役員改選ニ付演説」（『明六雜誌』明八・一二）の二文獻に詳しいのでここでは省略する。社員の人選は西村に一任されたようであるが、森の意図を汲んだ的確なものであった。参加依頼をうけたほとんどの者が幕府開成所関係者であり、その内半数が留学もしくは洋行の経験をもった知西派の洋学者であった。かかる明六社結成の急速な実現は、まさに「森の急進論と、西村の有志家肌とがよくマッチした結果」（大久保利謙『明六社考』立体社、昭五一・一〇）に他ならない。

《展開》

明六社は当初、森有札・西村茂樹・西周・津田真道・中村正直・福沢諭吉・加藤弘之・箕作秋坪・杉亨二・箕作麟祥の十名を創立社員として発足したが、あくまで各自の自由な発意による自主的な文化団体であり、その意図するところは「専ら教育ニ係ハル文学技術物理事理等凡ソノ才能ヲ富マシ品行ヲ進ムルニ要ナル

事柄」を研究討論したり、〈我国ノ教育ヲ進メル〉ためにその有効な手段を討議したりといった、もっぱら啓蒙的精神に基づく国民の知的、道徳的開発にあった。社の具体的行事としては、月二回の例会開催、演説会や講演会の開催等があげられるが、社独自の事業として忘れてならないのが機関誌『明六雑誌』の発行である。

『明六雑誌』の発刊も森の発想にかかるとものであり、明治七年三月に第一号が創刊されて翌年十一月に四十三号をもって終刊するまで毎月二号乃至三号発行されている。粗末な薄黄色の和紙に印刷した平均十葉二十ページほどの小型雑誌（現在のB6判に近い）であったが、これこそまさに日本の雑誌発行の嚆矢であり、以後の多くの学術雑誌、評論雑誌がこの型を踏襲している。同誌の反響はかなりの大きく、発行部数も毎号平均三千二百余部にのぼったといわれる。誌上には斬新で多様な論説が掲げられたが、内容は政治、経済、法律、哲学、宗教、教育、科学等広汎多岐にわたり、啓蒙期にふさわしく百科全書的な要素が強く全編にみちみている。文章は大部分が片仮名交じり漢文の格調高いものではあるが、諸編ともに各自の課題を「実学」的立場から国民生活に密着した合理的、実際の解説に結びつけつつ、簡明な筆致で綴っている。

ところが、明治八年六月に反政府的言論の弾圧と取締りの目的で讒謗律と新聞紙条例が公布されると、非政治的立場をとる明六社としても対岸の火災視出来なくなり、九月一日の例会では雑誌廃刊が続刊をめぐる社存亡をかけるほどの大論戦が展開された。この結果、福沢の提出した「明六雑誌ノ出版ヲ止ムルノ議案」が圧倒的支持をもって採択され、『明六雑誌』はこの後十月、十一月の二回発行し、第四十三号を以て停刊中絶することになったのである。明

六社自体もこの時以来自然解散の形をとるのである。

〈意義〉 かかる明六社並びに明六雑誌の活動停止を権力との衝突のおそれの回避とするのは短絡的であり、大久保利謙の指摘するように〈明六社はその体質、各社員の立場から、社そのものがよくその使命を終り、活動を停止すべき状態となって終末を迎えた〉（『明六社考』）とするのが妥当であろう。その他、社員の結合の脆弱性や統刊論の森有礼がこの年十一月に特命全權公使となって清国に赴任することになった事情も活動停止の要因と考えられよう。しかし明六社の啓蒙的精神はその後東京学士会院（明治一二年創立）に継承され明治リベラリズムの発展を促して行くことになる。

（大塚孝明）

戯 作

〈概括〉 戯作とは文字通りたわむれに作ることで、またはその作品をさし、その作者を戯作者という。文学史的には近世後期の洒落本・滑稽本・黄表紙、さらに合巻・読本・人情本などの小説類、およびその発想と手法を受け継ぐ明治初期の合巻類の草双紙・ボール表紙本・新聞続き物の類をいう。

〈成立〉 十八世紀後半、上田秋成・平賀源内・大田南畝らが俗文学に手を染めた頃から始まり、十九世紀前半、滝沢馬琴・山東京伝・十返舎一九・式亭三馬・柳亭種彦らの登場によって高度の発達をとげる。

戯作の特色はその内容よりも表現技巧にあり、その発想の源泉は〈うがち〉であり、表現技巧は〈趣向〉第一にあった。

〈展開〉 幕末の動乱と明治維新という政治的社会的な変動は、戯作を含めた文学そのものの存立の基盤を大きくゆすった。戯作者たちはそのパトロンであった有力な商人層を失い、社会的経済的な混